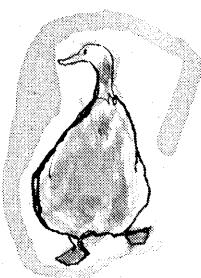


子どもと民話



中村 博

おばあちゃんのはなし

山形県の農村で、いろいろのまわりにこしをおろし、おばあちゃんからきいた「むかし」、また、群馬県の山村で、暗い電球の下で、こたつに入りながらきいた、おばあちゃんの「むかしあつたげな」の話、方言が入って、その一つのことばはわからなくとも、「へエ」とか「フン」とか、その地方でつかわれているあいの字を入れて話を聞くと、語っているおばあちゃんの話にリズムがてきて、楽しい音楽になって、私の耳に入ってくるのです。そして、とても心が安まるのです。

なぜでしょう。

都会で、毎日公害のきたない空気をすつたり、交通戦争のま

ん中にいるからではないと思うのです。

語りてのおばあちゃんと聞きての私たちが語りとあいのてで一つになつて、人間と人間がふれあつてできる、語りの芸術の

わらべうた

あるところで、わらべうたを研究している人たちが集つてゐるところがありました。二人がむきあつて、ほおをゆびさして、おでこをさわつて、わらべうたをうたいながら遊んでいるので

中にとけこんでいるからだと思うのです。

おばあちゃんの語りは新劇の俳優さんのようにうまく語つてくれません。だが、その土地にながく住みつき生活してきた者のみができる生活の中から語らなくてはいられないものがあるようだ思うのです。だからこそ、私の心をうち、心をやすめてくれるのです。

文字も文章もうまくかけないおばあちゃんが、それこそ、先祖から何百年も継承されてきた話、それはその土地に生きていける生物と同じ、いや、人間の歴史そのもののような重さを感じさせるのです。

す。

へこは じいちゃん にんどころ
ここは ばあちゃん にんどころ
ここは とうちゃん にんどころ
ここは かあちゃん にんどころ
ここは ねえちゃん にんどころ
かいごう かいごう……

にんどころは似たところといういみでしよう。赤んぼうや幼い子どもと、この遊びをしたらどうでしょう。ことばはわからぬでしよう。だけど「キャッキャッ」声をだして笑うでしよう。赤んぼには、幼児には、こんなことばはわからないから、遊んでもしようがないと考える方が最近の若い母親に多いとききました。

だが、ここに大変大事なことがあると思うのです。私は、子どものとき母親に「ぼくはどこから生まれたの」ときいたとき

やえもん伝説

「おまえは、川からひろつてきたんだよ」と言われたことがあります。この母親のことばを少年になるまでおぼえていて、

母親を大変にくんだことがあります。

ところが、ここにでてくるわらべうたは、ほおをさしながら「ここは じいちゃん にんどころ」おでこをさわりながら「ここは とうちゃん にんどころ」とうたつていくのです。こ

とばがわかるとかわからないとかいうまえに「おまえはおまえだけで生きているのではない祖先の血をひいて生きているのだ」という人間の歴史を教えていないでしようか。

それに、そのうたの音とリズムは、一度きくと、すぐおぼえてしまうのです。私はそれを日本人のもつ民族音だからだと思うのです。そして、このうたは、現代の有名な作曲家や作詩家がつくったものでなく、むかしから、家のなかや、労働の中で伝えられてきたものなのです。

「むかし」も「むかしあつたげな」の話もこのわらべうたと同じように、リズムがあり誰がつくったかわかりませんが、ことばやリズムで伝えられてきたことにまちがいありません。そこには、声をだしていわなくては、語らなくてはいられない生活があるのだと言えるでしよう。

先日、世田谷区の喜多見町というところに古老をたずねていきました。そのときに、

「わたしの子どものころはこのあたりは草原で、山あり川あり、それはきれいなところでした。東宝撮映所のところも草原で成城までずっと見えました。遊ぶところは、いまの成城、祖師谷、喜多見あたりの原っぱです。そして、原っぱを

かけまわるとき「ささら」（竹の先を細かくさいたもの）を持つて、自分のまわりをたたきながらへびもまむしもどつけどけ、おいらは喜多見のやえもんだ。やりも刀も持つてゐぞゝと声をそろえてかけずり回つたもんだ」

と話をしてくれました。やえもんという人の伝説があるので、この地域にはへび、まむしの類がたくさんいたのでしょうか。そこには、やえもん伝説を生かした、人間の生活の知恵があるようだ。

やえもん伝説とは、むかしこの地のとの様が狩りいでたとき、家来のやえもんが、えものを探しているとへびとししがあらそつているのにで、ししを槍でつき、へびをにがしてやつたのです。その後へびはやえもんに恩をかえしたといふのです。以上のようなことから、「むかし」も「わらべうた」もそして伝説も、私はみんな民話というジャンルの中に入れて考えることにしたのです。そして、民話が語り伝えられているだけではなく、それは、その地方の生きた歴史であり、人間の生活そのものであると考えるのである。

したがって、日本人という人間をつくるのに、大変重要なものが、だつたのではないかと考えるのである。

近ごろ、よく聞くことばで「民話ブーム」といわれていますが、本当にそうでしょうか。たしかに本屋さんに行くと、「〇〇の民話」とか絵本がたくさんならんでいます。学級の子どもも、松谷みよ子さんや大川悦生さんのむかしばなしの本をたくさん読んでいます。母親の集りに行つても、読書会に行つて「民話って、おもしろいですね」とか「民話を研究しているのです」という声をききます。また、ある学校では、国語教科書にでている「一寸法師」や「かさじぞう」の文と、原話と称して、ある作家のかいた「一寸法師」や「かさじぞう」と文章をくらべて「どんぶらこっこすつこっこ」の方がいいとかといふ批判をし、それが民話の研究のようにいい、発表することによって、民話ブームということばをマスコミにのせているのではないかと考えられるふしもないではありません。

私は作家の方々が書かれた、民話文学を否定するものではありません。作家の方々も、地方へでかけ、いろいろのまわりではなしを聞かれてることを知っています。そして、その語りでの生活をからだで感じ、からだでうけとめて作品として書かれていることも知っています。そして、その人たちの民話文学が民話ブームをよんでいることも事実でしょう。だからと言つて、私はブームということばはあまりすぎではないのです。

それよりも民話や、民話を語りつぐ姿や、民話で何を語ろうとしているのかというようなことを、本当のいみで定着させることだと考へるのであります。

民話の心

むかしばなしに「たにしきつね」という話があります。う

さぎとかめのような話ですが、たにしきつねが競走をするのです。スタートでたにしきつねのしつぽにしがみつき、ゴールの近くできつねがうしろをふりかえたとたんにしつぽから離れてたにしが勝ったという話なのです。

この話でたにしがずるいと言えるでしょう。小さい者が生きていくためのたくましい知恵だと思うのです。自分の子どもが小さければ、知恵を働かせて生きていくのだよという願いをこめて語るでしょう。民話には、そういう民話の心のようなものがあるのです。

これは本当にあつたことです、富士男君というとても小さな子が学年で一番大きな昇君と相撲をとったとき、しきりに入つて、にらみあつたとき、急に目じりを両手でさげたのです。もちろん昇君は笑いだしました。そのときはかさず押しだしました。四十八手にはない「笑いだし」という手になるでしょう。このことは、「たにしきつね」の現代版と言えないでしよう。

か。

教師や母親が、民話文学でも、民話でも、そういういみで、深く民話をとらえて、子どもたちに語ってやれば、それは生活の中に生きていくと思うのです。

おわりに

さいごに、都会でも農山村でもそうなのですが、最近テレビがどの家庭にも入り込み、家の中での対話がなくなってきたと言われています。

先日も福島県の農村に行つたとき、テレビがあるので子守りもみんなテレビのマンガにまかしてしまったので話を忘れてしまったよという、八十七歳のおばあちゃんにいました。私たちが出かけて行つたので十数年ぶりにおもいだして「むかし」を語つてくれたのですが、その家の中学生の孫が、はじめて聞く自分の家のおばあちゃんの話を感心してきいていました。

いまからレパートリーをたくさんもつことは無理かもしませんが、一つでも二つでも、これならできるという話を身につけて、子どもたちに語つてあげましょう。それは日本の文化財を発展させる未来の主人公になるのです。

(世田谷区立三宿小学校)